▶OfByForコラム◀

地域の地域による地域のためのSomething NEWS

第㉞回

「まち育て」を育む人の広がり
――「おわりははじまり」での確証

一般社団法人 洸楓座
一般社団法人efco.jp
代表理事 佐藤 建吉

▼住民主体の「まち育て」の旅立ち

2018年2月、いくつもの伝説を遺して、建築家・延藤安弘は別世界に旅立った。行年、77歳。延藤の活動は、この世では終わりになったが、あの世での始まりとなった。風の人・延藤が、活動の地をまた替えたのだろう。

それは、また延藤と関わりを持ったこの世の者たちの自立した活動の始まりとなった。延藤が著書に書いている、

It is not the end…it's the beginning!

が、現実となった。

▼延藤安弘の学究

後に、NPOのまちの縁側育み隊の隊長となる延藤安弘は、1940年12月、大阪に生まれた。延藤は1960年、精神的自然的風土を求めて北海道大学建築工学科に進学した。4年後、卒業論文『日本の都市住宅の社会経済的考察』を纏めた。

北大の図書室で知った京都大学の西山夘三の著者『国民住居論』や『これからのすまい』に刺激を受け、北大から京大へ転じた。その経緯が面白い。延藤から西山先生へのラブレターに、官製はがきに1行、「君は大学院を受けたまえ」とあったという。そして京大大学院修士課程に進学した。

2年後、『住宅・建築・地域計画の方法論的考察』を修士論文に纏めた。続いて、京大大学院博士課程に入学したが、すぐに中退し同大の助手に採用された。

延藤の仕事は、建築における計画系の分野である。助手時代には、英国留学も経験し、1976年に、学位論文『都市住宅供給に関する計画的研究』として纏めた。これは、住宅供給システムについてのその後、モデルとなったという。

さらに、1984年には、英国の住居の変遷について、とくに空間と住み手との相互関係、相補性に着眼して、『ハウジング論序説』とした。延藤も当時は、ふつうの真面目な研究者であったようだ。

▼「表現の魔術師」延藤安弘

延藤は、理論と分析に直観力を活かし、個人と公共のハザマを「縁側」ととらえた理論構築を加えて、コミュニティとの関わりの実践や取り組みを行った。筆者は、まだ訪ねていないが、延藤は京都でのコーポラティブ・ハウス「ユーコート」の企画に参加した。その名称は、レイアウトの形状に由来するそうであるが、それだけにとどまらない。友、悠、遊、裕が重ねられ漢字の音の響きが共鳴し強調される。

このように、コミュニティ・デザインやコミュニケーション空間づくりが延藤の生涯のメインのテーマとなった。それを、伝えるために、のちに延藤を幻燈師に仕立てたのであった。

1985年、延藤は、京大から熊本大学に異動し、延藤研究室を構えた。が、活動の場はそこにとどまらず全国各地に及ぶ。

「住民参加のまちづくり」、「もやい」、「まちの縁側」、「住縁エコロジー」、「住縁」社会づくり、などのキーワードとなる言葉を発した。延藤のこうした言葉は、「言の葉」や「言の端」ともいい、さらに「言霊」にも由来して、構成していると思われる。

延藤は、彼の取り組みを伝える方法に、「幻燈会」と命名して、プロジェクターを2台使う方法を定番とした。その方法は、明快でかつ本質を伝える情感と臨場感に満ちた芸道ともいえるものであると聞いている。

▼縁づくりの名人・延藤安弘

延藤は、熊本から1995年、名古屋の名城大学教授に異動し、さらに1997年4月、新設された千葉大学の都市環境システム学科に異動した。ここで筆者は、延藤と同僚となった。

延藤の活動や関わりは、「縁」をつなぐものであり、京都、熊本、名古屋、千葉、そしてまた名古屋と、勤務地や住所を替えた。ゆえに、延藤は「風の人」ともいわれる。が、その地にすぐ根差すので「土の人」とも呼ばれる。

「縁」は、「縁側」として建築計画にコミュニケーション空間として具体化され展開された。それは、SP空間（セミ・プライベート空間、およびセミ・パブリック空間）と表記された。コーポラティブ・ハウスのコンセプトは、SP空間にあり、展開された。

延藤は、建築家が端緒であったが、日々の出会い、自身の切り口で、新しく建築家という境地を得ている。

それを示したのは2003年のことだ。千葉大を突然辞めて、名古屋市長者町でのNPOまちの縁側育み隊として、街の現場に赴き、住民の話を聞き、課題を明快にまとめることを実践したのだ。

その手法の結論として以下の①～⑥を例示できる。①縁を大切にしながら出会いを最高にすること。②どうしようもないトラブルをエネルギーにする。③易しさと分かりやすさをもってコミュニケーションに赴くこと。④好きやという感覚から始めよう。⑤広い領域をたゆまず越境し続けること。⑥論を現場から立ち上げよう。

この各項の音の頭文字を書きだすと、「エンドウヤスヒロ」となる。

2018年5月12日、名古屋で行われた「延藤安弘先生を偲ぶ会」に参加した。会場には、550名を超える知己の人々が参集した。その会の副題には、「おわりははじまり」と記され、故人の遺志を受けとめる関係が示されていた。延藤の著書は47冊を超えており、その読者は、同じく共感をつくりだしているだろう。

▼「再エネのまち育て」

本稿では、延藤ワールドの実相を述べた。筆者は、日本にも「再エネのまち育て」と重ね、育む人の広がりを進めたいと考えている。延藤ワールドの手法を表として掲げる。この対比は、再エネの普及においても適用できるだろう。

延藤ワールドの特色と手法

これから まち育て	従来型 開発者主導のまちづくり
▶空地は自然や市民活動のプロセスで再生	・空地はプロジェクトで埋める
▶問題解決に向けたプログラム	・問題解決よりプロジェクト自体が目的化
▶経験の蓄積・コミュニティ・ウィズダム	・ビッグプロジェクト
▶市民の専門家、NPO	・大手デベロッパー・建設会社
▶市民自身による公共	・大公共事業
▶独創的な事業家	・大資本
▶アーバン・ハズバンダー（まち育て家）	・プロジェクト・プランナー